国際性とローカリティが描く、美しい同心円

――ピンチャー時代のアンサンブル・アンテルコンタンポラン――

◉沼野雄司

■伝説のはじまり

シェーンベルクといえば、「無調」や「12音技法」の創始者として名が知られているわけだが、しかしもうひとつ、音楽史上におけるきわめて重要な貢献がある。『月に憑かれたピエロ』（1912）で、まったく新しい、柔軟な編成を採用したことだ。

たった6人という小人数の中に、管楽器、弦楽器、ピアノ、そして声が入るというミニマムなオーケストラを成すこの編成は、それまでの音楽史において「ありそうでなかった」ものといえる。このアイディアは、すぐさま多くの追随作品を産み出すとともに（ストラヴィンスキー、ラヴェル etc.）弦楽四重奏やピアノ三重奏といった古典的なフォーマットから外れた、多種多様な「20世紀アンサンブル作品」への道を開くことになった。

しかし、大きな問題がひとつある。いったい、誰がそれを演奏するのか、だ。

従来、こうした新しい編成による作品の演奏は、オーケストラの一部の団員をセレクトするか、あるいはソロ奏者の寄せ集めによって担うほかなかった。これらは双方に若干の問題があろう。まず、オーケストラの団員は、基本的には古典的なレパートリーの専門家であるのに加えて、なにより団体のスケジュールに直接的に拘束される。一方でソロ奏者の寄せ集めの場合には、現代音楽のスペシャリストを集めることはできるけれども、お互いが息を合わせて共同作業を行なうまでには、それなりに時間がかかる……。

1976年に設立されたアンサンブル・アンテルコンタンポラン（EIC）は、こうした「20世紀アンサンブル作品」に関わる諸問題を一気に解決する、強力な常設団体として誕生した。

人数は総勢31人。8人の弦楽器を中心にして、木管と金管を2本ずつ揃え、さらには鍵盤楽器、打楽器、ハープが入っているから、まずほとんどのアンサンブル作品はこの編成でカバーできる（声楽だけはゲストが必要だけれども）。しかもきちんとした「固定給」が支払われる現代音楽専門の「常設団体」であるから、つねに高水準の演奏を提供することが可能だ。こうして伝説は始まった。

■国際性とローカリティ

日本に住むわれわれが「EIC」と聞いてまず思い出すのは、創設者ピエール・ブーレーズ指揮による一連のディスクだろう。新ウィーン楽派やストラヴィンスキー、あるいはカーターやリゲティ、そしてもちろんブーレーズ自身にいたる録音の数々は、たいていの音楽ファンならば、CD棚の中に数枚は見出すことができるはずだ。

ただし、この団体を考えるときに少々注意しないといけないのは、1979年には既に、ブーレーズが音楽監督の座をハンガリー人のペーテル・エトヴェシュに譲っていることである。ブーレーズは晩年にいたるまでEICと録音を続けたから、なんとなくずっとトップに居続けていたように思われがちなのだが、早くも創立から3年後には自ら監督の座を降りているわけだ（その後は「名誉総裁」に就任）。

その後、1991年まで10年以上続いたエトヴェシュ時代を引き継いだのが、アメリカ人のデイヴィッド・ロバートソン。さらに彼が7年務めたあとは、我々も良く知るイギリス人指揮者ジョナサン・ノットが監督に就任し、その後はフィンランドの女性指揮者スザンナ・マルッキへと受け継がれた。そして6代目の音楽監督として2013年からその任にあるのがドイツ人のマティアス・ピンチャーである。

筆者が何を言いたいか、もうお分かりだろう。音楽監督はフランス→ハンガリー→アメリカ→イギリス→フィンランド→ドイツという具合に、すべて出身国がまったく異なるのだ（いずれ、アジア人が監督を務める日もくるのではないか）。つまり彼らは、パリに拠点を置きながらも、かなり意識的にインターナショナルな性格を団体に与えようとしている。まずはここに、この団体独特の強みがあろう。

もっとも、その一方で彼らがフランスという国の音楽伝統に立脚していることもまた事実だ。現在、世界中に多くの現代音楽アンサンブルが存在する中で、EICの最大の特長は何か、とピンチャーに尋ねた時のこと。彼は即座に「良い意味でのフランスの伝統を持っていること」と答え、次のように続けた。

「彼らの音響イメージの核には、独特のイントネーションがあります。このイントネーションというのは、単にフレーズがどうとか、バランスがどうとかいう単純な話ではなくて、いわばソルフェージュの問題なのです。フランス語でいうところのクラルテ（明晰さ）と言う単語が適切でしょうか。EICの音色を決定しているのは、そうした彼らの耳の良さに他なりません。彼らは、それぞれの音楽に必要なニュアンスをすぐに判断して、音色を作ることができるわけで、ここが他の団体と全然違うところなのです」。

ピンチャーの言は、この団体の演奏を聴いたことのある人ならば誰もが納得することだろう。「国際性」と「フランス性」、一見すると相反するこの二つの要素が美しい同心円を描くのが、EICの音楽なのである。

■現在のEIC

さて、では現在のピンチャー体制のアンテルコンタンポランは、どのような団体なのか。創立以来、40年以上にわたる伝統を受け継ぎつつも、彼らにはこれまでとは異なる特徴がいくつかある。

まず、ブーレーズ以外の歴代の音楽監督に比べると、録音を次々にリリースする気配があること。これは、2016年にブーレーズが亡くなっていることとも関連していよう。いわば「ブーレーズ後」をあずかる、初の音楽監督がピンチャーなのだ。

そして、単に現代音楽マニアだけにアピールするのではなく、子どもたちを対象にした学校でのアウトリーチ活動など、社会の中に開かれた団体を目指していること。現在、多くのオーケストラや音楽団体がこの種の活動を行なっているけれども、EICの場合には「現代音楽」というツールを核にしている点で、きわめてユニークだ。この傾向はこれからも加速してゆくだろう。

そして何より重要なのは、これまで以上に、未知の作曲家をピックアップし、新しい音楽を探求しようという姿勢が鮮明であることだ。それは今回の来日プログラムを見ても明らかだろう。どの演奏会にも、ほとんど例外なく、まだ我々が知らない作曲家による作品が含まれているではないか。

ピンチャーへのインタビューでは、こうした新しい才能の発掘の基準についても訊いてみた。「年代、ジェンダー、民族性、こういったものは気にしませんね。むしろ多様であるほどいい。ともかく重要なのは、楽譜がパーソナリティを持っていて、何かを言おうと強く欲していること。そして、その知性が身体性と結びついていることです」。

そう、実際、彼との約1時間の会話の中で何度も出てきたのが、多様性diversityという単語だった。「今回の日本公演のメニューは、実にいろいろな食材から出来ています。それぞれ本当に違っていて、とてもカラフルなんですよ」と力を込めて語るピンチャーは、新しい作曲家たちの多様な個性を何より大事にしているように筆者には感じられた。

1976年にブーレーズのもとで発足したEICは、かくしてフランスという国の伝統の上で、21世紀の文化が持ち得る多様性を、可能な限り探し求め、音として実現しようとする。ピンチャー時代のEICを応援したくなる所以である。

［ぬまの ゆうじ（音楽学）］